Product Showcase

いまが旬の製品を徹底比較

Dreamweaver ×GoLive ×ホームページ・ビルダー
同時期に大幅進化した ウェブオーサリングソフトのここが買い!

text = 山田貞幸

2003年末から2004年初頭にかけて、有力ウェブオーサリングソフトウェア3本の新バージョンが出揃う。この3本は、いずれも「ウェブオーサリングソフト」「ホームページ作成ソフト」というジャンルに括られはするものの、方向性はそれぞれに違うものだ。各ソフトの特色を見比べ、同時にウェブオーサリングソフトとして共通する部分も見ていこう。

HTML作成ツールから発展して 企業戦略と製品の方向性の違いが明確化

あらゆる要求を効率的に満たす オーサリングソフトへ飛躍

ウェブオーサリングソフトウェアの進化は、ウェブの進化でもある。かつては、HTMLタグを直接入力しなくてもWYSIWYG環境(ソース編集ではなくページのイメージ表示を直接編集)でウェブページを編集でき、ウェブサーバーにファイルを転送できることが、ウェブ作成ソフトに求められる機能のすべてだった。その後、サイトの大規模化によってサイト管理機能が重視されるようになり、DHTML(Dynamic HTML)や動画、Flashといったリッチコンテンツが利用されるようになれば、それらに対応した機能が追加され、スタイルシートの重要度が増せばスタイルシートの編集機能が求められるようになっていった。掲示板やアクセスカウンター、バナーなど、流行の機能をいち早く盛り込んでいったソフトもあった。

HTMLはバージョン4、CSSもバージョン2で安定している現在、単純にウェブページの制作支援やサイト管理機能だけが必要であれば、1、2世代前のソフトでも十分だ。では、最新のウェブオーサリングソフトに求められる機能は何なのか? 今回取り上げた3本のソフトは、それぞれの企業らしい回答を用意している。

直感的により多くの機能を 使いこなす次世代型

まず、マクロメディアの「Dreamweaver」は、以前から同社のFireworks(ウェブグラフィックス作成ソフト)、Flash(Flashオーサリングソフト)、FreeHand(イラストレーション、レイアウト作成ソフト)、ColdFusion(ウェブアプリケーション開発ソフト)などとともに、プロのウェブクリエイター向けの統合パッケージとして提供されてきた。同社の製品群の伝統として、Flashを中心としたリッチコンテンツに強いことが挙げられる。そしてこれらを抜きにしてプロのウェブ開発を語れな

■Macromedia MX 2004ファミリー

●Macromedia Studio MX 2004 日本語版(左)
Dreamweaver MX 2004、Flash MX 2004、Fireworks MX 2004、FreeHand MX、ColdFusion MXデベロッパー版(ウィンドウズ版のみ)の5本を同梱したパッケージ(いずれも日本語版)。
通常版98,000円、アップグレード版48,000円(Studio MXから)/60,000円(MX、MX 2004のうち1製品から)

●Macromedia Studio MX 2004 with Flash Professional 日本語版(右)
Flash MX 2004 日本語版に替わり、フォームベースの開発環境や高品質なビデオコンテンツの開発機能、モバイル対応Flash開発機能などを持つFlash MX Professional 2004 日本語版を同梱。
通常版120,000円、アップグレード版60,000円(Studio MXから)/72,000円(MX、MX 2004のうち1製品から)/36,000円(Macromedia Studio MX 2004から)
※価格はすべて税別

インターネットマガジン/株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

い現在では、マクロメディア製品群は、プロのウェブクリエイターにとって必須になっていると言ってもいい。

今回のDreamweaver MX 2004は、単体のほかにもFlash MX 2004／Flash MX Professional 2004、Fireworks 2004とともに「Macromedia Studio MX 2004」という統合パッケージも登場した。同社はこのパッケージによって「『RIA』（リッチインターネットアプリケーション）の開発が可能となり、高齢者や障害者はもちろん、一般ユーザーにとっても、さらにインターネットが利用しやすくなる」としている。RIAとは、PCアプリケーションと同等の使いやすいインターフェイスを持ったウェブアプリケーションのことで、直感的により多くの機能を使いこなせるようにするものだ。

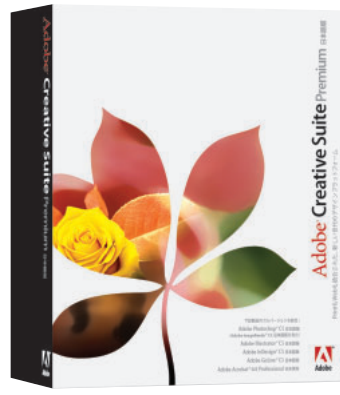
紙媒体とウェブサイトの統合や連携を実現する

その一方で、アドビシステムズはPhotoshop（フォトレタッチソフト）やIllustrator（ドローソフト）といったデザイン分野での有力アプリケーションを持ちながら、ウェブオーサリングの「GoLive」の知名度は今ひとつで、この分野ではマクロメディアの後塵を拝してきた。

今回同社はPhotoshopやIllustrator、InDesigon（DTPソフト）、GoLiveの単体パッケージ製品4本を同時にバージョンアップした。そしてバージョンの表記として通常使われる数字の代わりに「CS」（Creative Suite）を付けて統一感を持たせ、「Adobe Creative Suite」（Adobe CS）という統合パッケージも発表した。

Adobe CSが目指すのは、ペーパーメディアとウェブメディアの両方にまたがるシームレスな制作環境だ。たとえば1つの商品について、紙のカタログやパンフレットと、ウェブサイトの両方を制作するようなプロジェクトにおいて、ペーパーメディア用の素材をそのまますぐにウェブサイトにも流用できるといった、ワークフローを大幅に効率化する統合ソリューションを提供する。リッチコンテンツでマクロメディアを追うのではなく、アドビが得意なデザイン分野の機能を強化することで、独自の方向を目指した形と言える。

■Adobe Creative Suite



●Adobe Creative Suite Standard 日本語版（左）
Photoshop CS（ImageReady CS同梱）、Illustrator CS、InDesign CSを同梱したパッケージ。そのほかファイルのバージョン管理を行う「Version Cue」も付属
通常版168,000円、アップグレード版98,000円（Photoshop日本語版登録ユーザー）

●Adobe Creative Suite Premium 日本語版（右）
Standardに加え、GoLive CS、Acrobat 6.0 Professionalを同梱
通常版198,000円、アップグレード版128,000円（Photoshop日本語版登録ユーザー）
※1月中旬発売予定。価格はすべて税別

ウェブサイト構築の楽しさを満喫する

最後に、IBMの「ホームページ・ビルダー」シリーズは、プロのウェブクリエイターをターゲットとしたほかの2本とは異なり、個人でウェブサイトを作るユーザーや、社内でウェブ制作を行う企業や自治体、SOHOなどをおもなターゲットとしている。プロのウェブクリエイター向けの製品ではないため、デザイナーが不在でも簡単にデザインできるように、豊富なテンプレートや素材集などが付属しているのが特徴の1つだ。

マック版がないこともあり、プロのウェブクリエイターが使うケースは少ないが、ページ編集やサイト管理などの基本機能では、ほかの2本に負けていない。

ホームページ・ビルダーシリーズの最大の特徴は、バージョンアップするごとにそのとき話題の新機能を貪欲に取り込んでいる点だ。今回のバージョン8でもブロードバンドを活用したウェブカメラやウェブ日記機能、オンラインショップ開設機能など多くの新機能を搭載し、カタログを見ているだけで試してみたい気分にさせてくれる。さまざまな機能を使いやすい形で提供することによって「ウェブサイトでいろんなことをしてみたい」というユーザーの欲求を満足させてくれるのが、ホームページ・ビルダーシリーズの最大の魅力だ。

■ホームページ・ビルダー Version 8の構成

「ホームページ・ビルダー Version 8」のパッケージには、本体のほかに10本のアプリケーションとユーティリティが付属している。「Webカメラ」と「商品マスター管理」がVersion 8の新機能

©1994-2007 Impress R&D

3大ソフトウェアの新機能の目玉を中心に徹底検証

Macromedia Dreamweaver MX 2004

マクロメディア URL http://www.macromedia.com/jp/software/dreamweaver/

通常版／ダウンロード版：48,000円　アップグレード版：19,800円　エデュケーション版：12,000円

リッチメディアを駆使した高い表現力が求められるプロの世界では、Dreamweaverが圧倒的なシェアを誇る。そのプロ御用達ソフトウェアの最新版として登場した「Dreamweaver MX 2004」の新機能のうち、特に大きな目玉とされているのが強力なCSS（カスケーディングスタイルシート）サポート機能だ。

CSS自体は特に目新しいものではなく、従来のバージョンでもサポートされていたのだが、機能の使い勝手が良くなかったり、利便性が十分に認識されていなかったりで、いまひとつスタンダードな技術としては扱われていなかった。ところが今バージョンでは、CSSのサポート機能が大幅に強化された。同時に、デザインの自由度の高さやメインテナンス性の高さ、HTMLコードのスリム化といったCSSの利点に対する認識が高まっている。Dreamweaver MX 2004を使えば、いよいよ本格的にCSSを活用したサイト構築が始められるというわけだ。

スタイルの定義や適用は「CSSスタイルパネル」（画面1）などいくつかのパネルを中心に行うことになる。外部スタイルシート用のファイルを作ったり、1ページにだけ適用するスタイルを定義したりといった使い分けも簡単で、スタイルの定義にあたっては、「スタイル定義ダイアログ」を使って対話的に定義を行う方法と、ソースを直接編集する方法（画面2）の2つから使いやすい方を選べる。

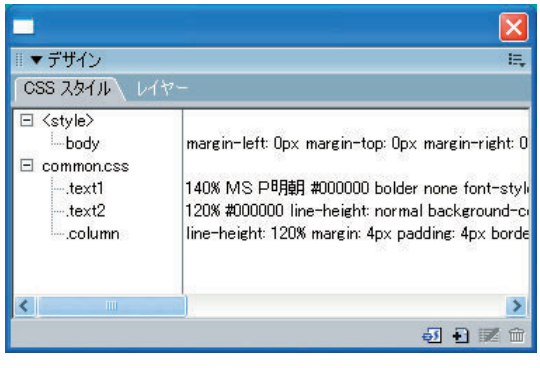
スタイルを適用するには、タグに直接適用する方法もあるが、ブロックレベル要素なら「Divタグを挿入」機能を使うのが軽快だ。

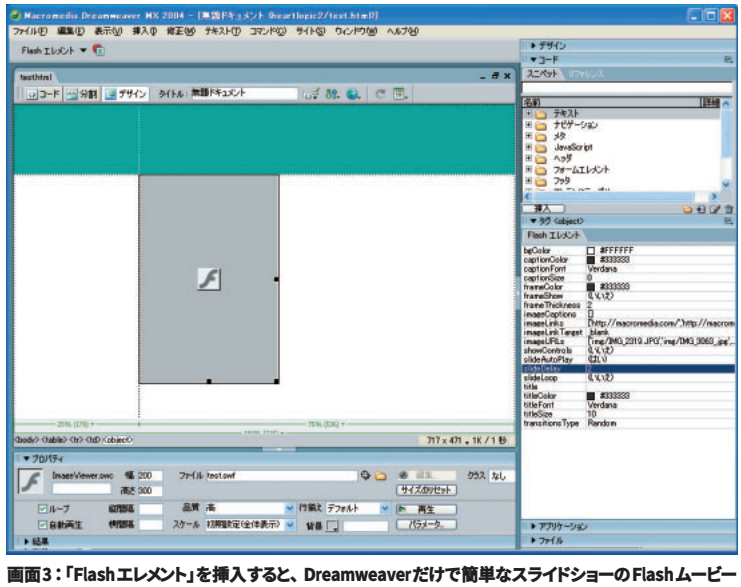
Dreamweaver MX 2004では、同じマクロメディア製品群との共通したユーザーインターフェイスの採用や機能の一部取り込みなどがされている。「Flashエレメント」は、Dreamweaver単体でFlashムービーを制作し、ページに双方向性を与える機能（画面3）だ。また、Fireworksテクノロジーによって、Dreamweaver上で画像をある程度加工できるようになった。

もう1つ注目したい新機能が「自動ブラウザ互換機能」だ。あらかじめ対象ブラウザーとバージョンを設定しておくと、ブラウザーが対応していないHTMLやCSSが使われた場合に警告してくれる。

画面2：スタイルシートのソースを直接編集する場合には「コードヒント」を使うと便利だ。ウィンドウズでは[Ctrl]+[Space]、マックでは[Command]+[Space]で表示される。

画面1：「CSSスタイルパネル」では、現在定義されているスタイルと属性の詳細が確認でき、編集中のページへの適用やスタイルの編集も行う。





画面3：「Flashエレメント」を挿入すると、Dreamweaverだけで簡単なスライドショーのFlashムービーを作成できる。画像やエフェクトはプロパティインスペクタと、タグパネルに表示される「Flashエレメント」パネル内で編集する。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

Adobe GoLive CS

アドビシステムズ　URL http://www.adobe.co.jp/products/golive/

通常版：24,800円　アップグレード版：12,100円　アカデミック版：9,200円

GoLive CSの魅力は、ほかのAdobe CSシリーズとの緊密な連携機能だ。この連携機能は「スマートオブジェクト」と呼び、PhotoshopやIllustrator、InDesignのデータ、PDFファイルをGoLiveで直接編集できるようになった。PDFに関しては、GoLiveで作成したHTML文書をPDFで保存したり、PDFにリンクを設定したりするといった作業もできる。また、これまでユーザーから「アプリケーションによって色味が違う」との指摘のあった点については、共通のカラーエンジンを採用することにより、Photoshopなどほかのアプリケーションと同じカラースペースが実現された。

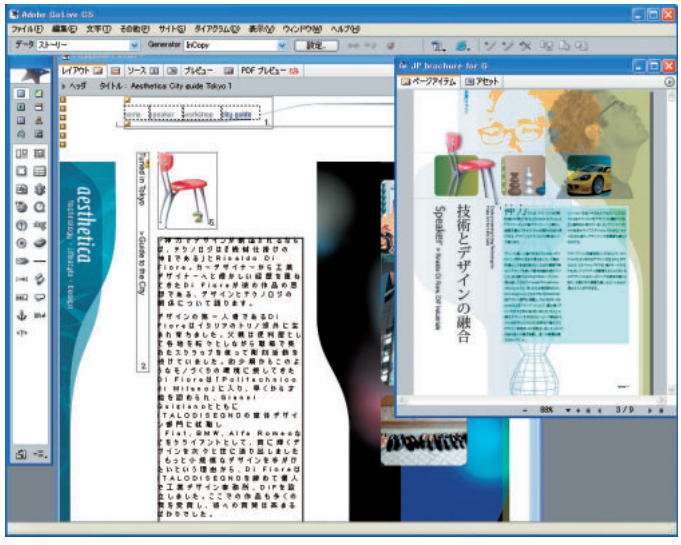
また、ユーザーインターフェイスも変わった。従来の独特なツールパレットが、Photoshopなど同社の有力なほかのソフトと同じような表示にも切り替えることが可能だ。これによって、新しくGoLiveに触れるユーザーも馴染みやすくなるだろう。

こうした中でも特筆すべき機能が、InDesignパッケージ機能だ（画像1）。InDesignで作成したDTPデータをGoLiveに取り込むことで、カタログなど印刷物の中で使ったテキストや画像を、パーツ単位でGoLiveの中に取り込める。画像を取り込む際にはウェブ素材用に画像の透過処理などの調整ができ、テキストを取り込む際には書式設定をそのままCSS化して流用できる。いったんInDesignのデータを取り込んだ後に、InDesignでデータの編集や修正をした結果をウェブ側に自動反映させることも可能で、紙とウェブの両方を作るプロダクトであれば、大幅な作業効率の向上が期待できる。

そして、もう1つ大きく進化したのは全Adobe CSシリーズに共通で、「Version Cue」アプリケーションによるファイルのバージョン管理が行えるようになったことだ。複数人で同じプロダクトの作業を同時進行している場合などでは、これを利用することでファイルの検索や最新バージョンの把握、旧バージョンへの差し戻しといった作業が圧倒的にスムーズになる。

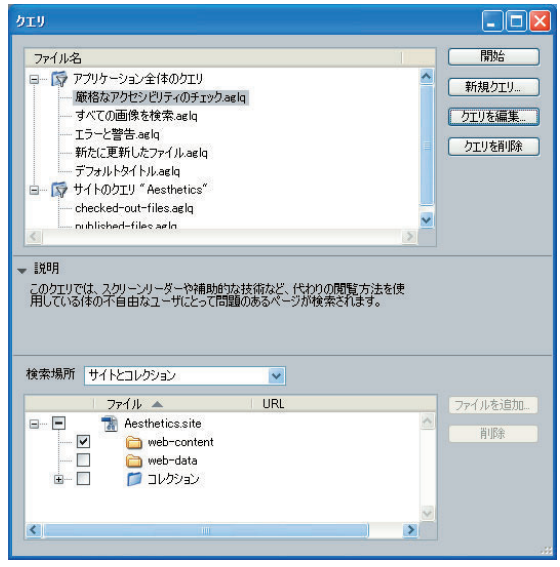
さらに、カスタマイズの可能なウェブページのアクセシビリティーをチェックする「クエリ」機能も付いた。HTML文法のほか、ファイルサイズや文書内容などの項目を独自に設定し、作成した文書をチェックできる（画像2）。

このほか、Watchfireの「WebXACTサービス」と連携して、ウェブサイトの品質やプライバシー保護機能、米国リハビリテーション法第508条（電子・情報技術アクセシビリティー基準）およびW3Cのアクセシビリティーガイドラインへの準拠など、さまざまに検証できる。アクセシビリティーに対する関心が高まっている現在、ウェブサイトの品質向上のために頼りになる機能だ。



画像1：InDesignパッケージをウェブページ化する作業。InDesignからGoLive用に保存したデータを開き、利用するパーツを選択したら編集中のページにドラッグ&ドロップする。画像はImageReady CSと同じ「Web用に保存」機能をGoLive CSが内蔵しており、それを使って最適化、保存される。文字は修正があれば、InDesignで修正すればGoLive側にも反映される。

画像2：「クエリ」では、アクセシビリティーのチェック項目をあらかじめ設定しておく。
※今回使用したAdobe GoLiveの画面写真はすべてベータ版



©1994-2007 Impress R&D

ホームページ・ビルダー Version 8

日本IBM　URL http://www.ibm.com/jp/software/internet/hpb/

通常版：12,800円　学割パック：8,800円　バージョンアップ版：6,800円など

ホームページ・ビルダーは、プロのウェブクリエイターを除けば、パーソナルユーザーから企業ユーザーまでに圧倒的なシェアを誇る。最新バージョンではユーザーからの要望が多かった新機能を多数取り込んでいるのが魅力だ。ここでは、それらの新機能を順番に見ていこう。

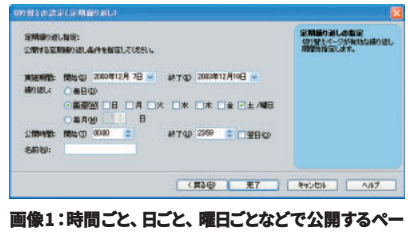
まず、ブロードバンド環境のユーザーが増えたことを受けた新機能がいくつか追加された。「Webカメラ」は、カメラやビデオの画像を逐次サーバーに送信するいわゆるライブカメラ機能だ。また「転送予約」や「Webサイトチェンジャー」（画像1）を利用すると、あらかじめ設定した時間に画像をアップロードできる。

たとえば1月1日の0時きっかりに元日用のページを公開したり、土日だけの特別ページや朝だけ、夜だけのページといったものを自動的に表示させたりできる。「Web日記」（画像2）と組み合わせて、新しい日記を定期的に公開するような設定も可能だ。

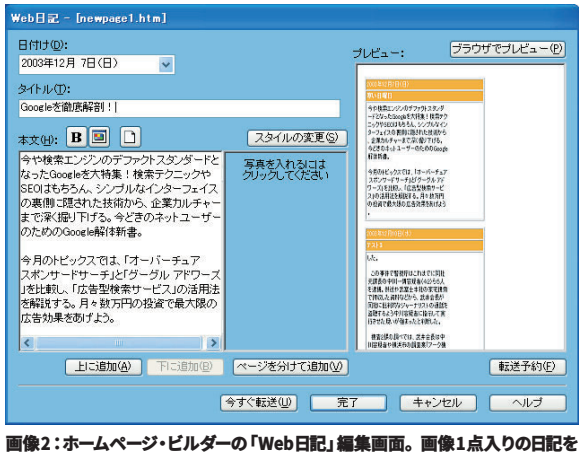
また、CGIなどサーバーサイドプログラミングが必要な機能を、外部のウェブで提供されるサービスとの提携によって簡単に利用できるようにしてくれるのもホームページ・ビルダーの魅力だ。従来のバージョンではティーカップ・コミュニケーションとの提携によって掲示板が作れるようになっていた。今バージョンでは新たにオンラインショップの作成機能が追加された（画像3）。これもティーカップ・コミュニケーションとの提携によるもので、デザインや取り扱い商品を設定していくだけでオンラインショップが開設できる。決済方法には代金引き換えの宅配や銀行振り込み、郵便振り替えが利用可能だ。

アンケート機能では、CGIを使用せずに回答をテキストメール化して、あらかじめ設定しておいたメールアドレスに送るタイプのアンケートフォームを作成する。このほかにも、プラグインによる拡張機能として、アクセス解析サービスなどが追加される予定だ。

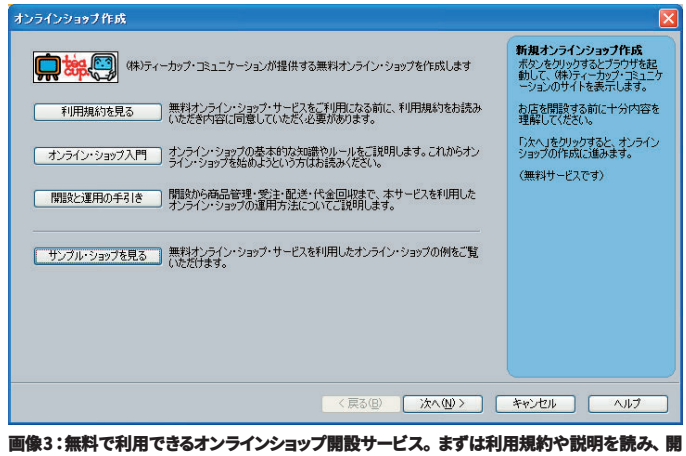
新機能はまだまだある。「e-ラーニング作成機能」は、動画や音声とPowerPointのプレゼンテーションを組み合わせたビデオ教材HTMLや、採点のできるテスト教材HTMLを簡単に作成する機能だ。さらに携帯電話用ページの作成ウィザードや、PC向けに作ったページを携帯用に一括変換する機能が搭載された。そもそものコンセプトがDreamweaverやGoLiveとはかなり違うこともあるが、「専門知識があるわけではないが、いろいろ簡単にやってみたい」というユーザーにとって、ホームページ・ビルダーがもっともいじりがいのあるソフトであることは間違いない。



画像1：時間ごと、日ごと、曜日ごとなどで公開するページを自動的に切り替えられる。



画像2：ホームページ・ビルダーの「Web日記」編集画面。画像1点入りの日記を書き込み、そのままウェブサーバーにデータをアップロードできる。データの転送予約設定をすることで、指定した時刻ちょうどに日記を更新することが可能。



画像3：無料で利用できるオンラインショップ開設サービス。まずは利用規約や説明を読み、開設を申し込む。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

HTML作成ツールから発展して企業戦略と製品の方向性の違いが明確化

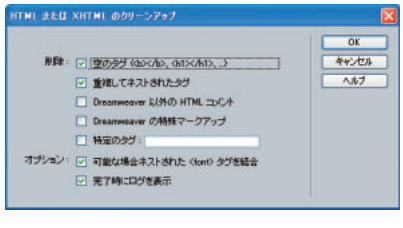
ハンドコーディングはいずれも重視

それぞれの特徴を紹介したところで、ここからはポイントごとに、3本の機能を比較してみたい。

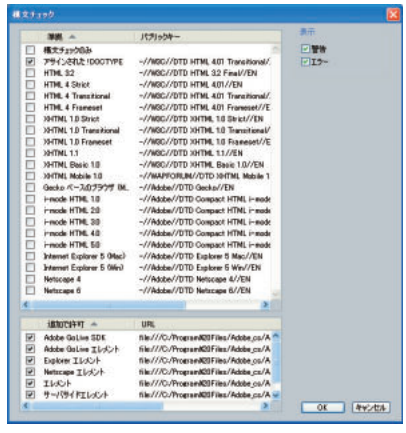
まずは、HTMLの「入力支援機能」と「構文チェック機能」を比較してみる。3本ともWYSIWYG環境での編集モードが充実しているが、より美しいコードの作成を考えればコードの直接編集を避けられないし、ハンドコーディングの方ほうが慣れているというユーザーも多い。そして構文チェック機能はハンドコーディングを行うユーザーにとって、特にお世話になる機能だ。

各ソフトともハンドコーディングの重要性を十分に認識しており、コードの色分け表示やプレビュー画面とコード編集画面との分割表示が可能だ。DreamweaverとホームページビルダーHPB)では、ハンドコーディングとWYSIWYGのどちらを重視するかで、基本的な画面レイアウトを選択できる。

DreamweaverとGoLiveでは、コード入力時に要素名や属性の入力を補助してくれる。長いスペルの入力の手間を省き、スペルミスの防止の役にも立つ便利な機能だ。また、Dreamweaverでは「ソースのクリーンアップ」機能を使うと(画像1)、WYSIWYG環境での編集時によく勝手に作られてしまう空のタグなどを自動的に削除し、ソースを整理してくれる。



画像1：Dreamweaverの「ソースのクリーンアップ」設定ダイアログ。



画像2：GoLiveの構文チェック設定。主要なHTMLやXHTML、ブラウザーに合わせてチェックできる。

構文やアクセシビリティーのチェックも簡単

基本的なHTMLの構文チェック機能は、すべてのソフトに付属している。Dreamweaverでは、さらに「自動ブラウザ互換機能」によってさまざまなブラウザーのそれぞれのバージョンごとに対応したHTMLを作成することが可能だ。GoLiveではそこまで細かくバージョンは選べないが、主要なブラウザーやバージョンを設定できる(画像2)。構文ミスがあった場合、ホームページビルダーでは自動的にこれを修正してくれる。

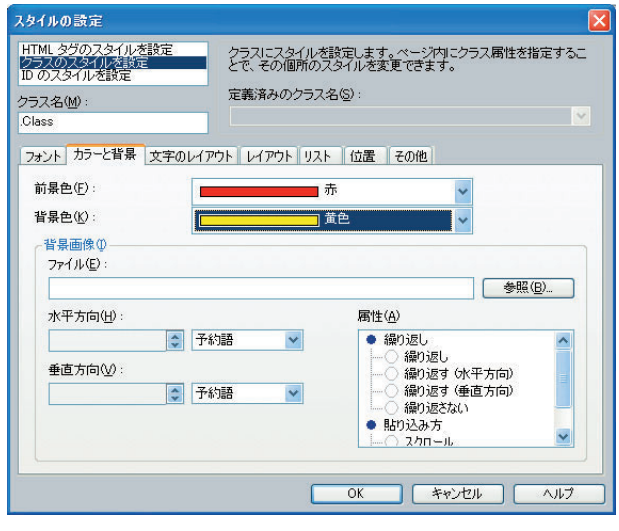
3本ともHTMLの構文だけでなく、アクセシビリティーのチェックもしてくれるのが嬉しい。ただし方法はそれぞれ異なる。Dreamweaverでは「サイトレポート」の1つとして、W3Cのアクセシビリティーガイドラインや、米国リハビリテーション法第508条に照らしてチェックする。GoLiveでは、これに加えて前述のとおり「クエリ機能」やWebXACTとの連携によってプライバシー保護などのさらに細かいチェックが可能だ。ホームページビルダーではチェックできる項目こそ少ないが、代替テキストの有無やフレーム、表関連のアクセシビリティーなど、基礎的な項目はカバーしている。

ハンドコーディング支援機能やチェック機能については、DreamweaverとGoLiveがほぼ互角で、ホームページビルダーは価格相応の機能といったところだ。

CSSの扱いやすさはGoLiveが一歩リード

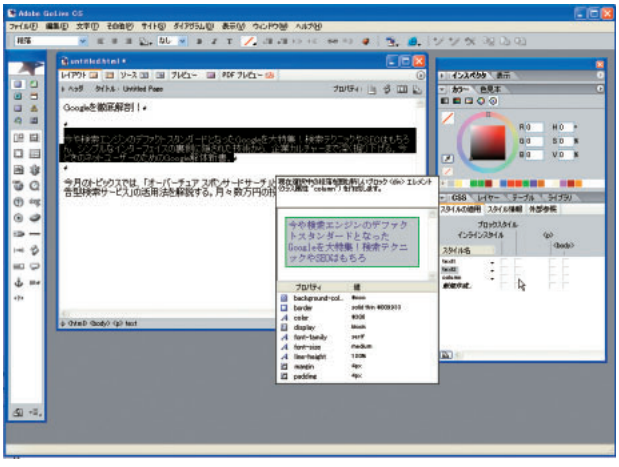
各ソフトとも、CSSサポート機能はバージョンを重ねるごとに進歩している。

まずスタイル定義の機能を比べてみよう。利用できるCSSは、DreamweaverとGoLiveではCSS1とCSS2、ホームページビルダーは



画像3：ホームページビルダーの「スタイルの設定」ダイアログ。色選択部分がウィンドウズ標準のインターフェイスなので、好みの色を選びにくい。

©1994-2007 Impress R&D



画像4：GoLiveでスタイルを適用するには、適用したい部分を選択し、CSSインスペクタでスタイルと適用する要素を選ぶ。「インラインスタイル」を選べば<SPAN>タグが、「ブロックスタイル」を選べば<DIV>タグが自動的に生成される。

CSS1とCSS2の一部だ。スタイルの定義や外部CSSファイルを作成するダイアログの操作性は、3本とも大差がない。しかし、ホームページ・ビルダーの設定ダイアログは、色が選びにくいなど少々詰めが甘い印象だ（画像3）。CSSのソースを編集する際に、Dreamweaverには「コードヒント」があり、GoLiveではHTMLと同じように入力補助が付いている。この両者の機能は五分五分と言えるだろう。

HTML文書へのCSSの適用機能は、GoLiveが一番使いやすい。定義しようとするスタイルのプレビューを見ながら選べるし、適用時に「インライン」を選べば<SPAN>タグ、「ブロック」を選べば<DIV>タグを自動的に作ってくれる（画像4）。Dreamweaverの「Divタグを挿入」より、こちらの方がスムーズな操作感であった。ホームページ・ビルダーにも、<DIV>タグを挿入する「レイアウトコンテナ」の挿入コマンドがあるが、少々わかりにくい。

もっとも、ホームページ・ビルダーを愛用するユーザー層の場合は、まだ無理をしてスタイルシートを使う必要もないだろう。スタイルシートのサポート機能はたしかに弱いが、それがそのまま弱点だとは言い切れない。

クライアント向けの簡易更新機能

ウェブ制作プロダクションがサイトを立ち上げた後で、小規模な更新作業はできるだけクライアント側に任せるケースが増えている。プロダクション側にすればいつまでも細かい仕事を引きずらずにすみ、クライアント側にしても運営委託費が削減できるうえにタイムリーな更新が可能になる。両者の思惑が一致しているわけだ。

しかし、プロほどのスキルを持たないクライアントに、そのままページの更新を任たのでは、ちょっとしたミスでページが崩れてしまうことがあるなど危険なことが多い。そのためのソリューションがマクロメディアで言えば「Contribute 2」（画像5）、アドビで言えばGoLive CSの新機能である「Co-Author」（画像6）だ。

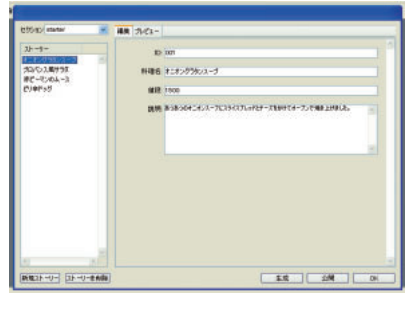
Contribute 2はStudio MX 2004ファミリーの製品ではないが、Dreamweaver MXと連携して、重要なコードを間違えて書き替えないように保護しながら、ページのテキストや画像、リンクなどを書き替えられる。またプロダクション側が用意したDreamweaverのテンプレートを利用して、クライアント側で新しいページを追加するなどの作業が行える。

これに対してGoLiveのCo-Authorは、GoLiveを使うプロダクションがページ中に編集を許可するエリアをあらかじめ設定し、クライアントはそのエリアの中だけを編集できる。使い方は極めて簡単で、クライアントの担当者のスキルはほとんど要求されないが、その代わりにクライアント側でページを追加したり、編集エリアの数を増やしたりといったことはできず、自由度は低い。

Contribute 2は単体でもサイトの構築ができる自由度の高いソフトだが、それだけ機能が豊富なのでクライアントに多少のスキルが必要になる。GoLiveのCo-Authorは、あくまでGoLiveで作成したサイトを更新するための付属ソフトなので、自由度は低いが簡単さが魅力だ。プロジェクトごとの要求に合わせて、どちらの環境を使うかを選択できればベストだ。

画像5：Macromedia Contribute 2のパッケージと画面。
URL http://www.macromedia.com/jp/software/contribute/　通常版価格：12,000円。

画像6：GoLive CS Co-Authorの編集画面。GoLive CSに最初から1ライセンス付属。追加ランセンスは9,200円。



インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

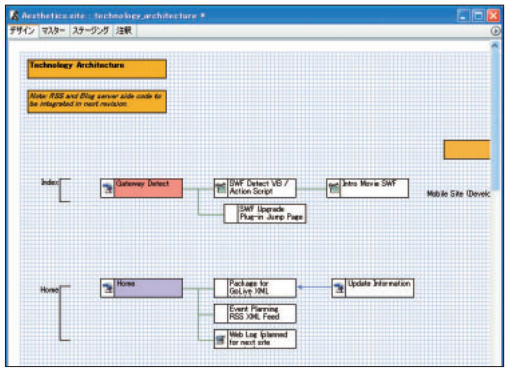
既存ユーザーは迷わずバージョンアップ 新規ユーザーや乗り換えはこう選べ！

Adobe CSをどう導入するかが鍵を握る

ここまで3本の新機能を解説し、重要なポイントを比較してきた。各ソフトとも、今回取り上げた内容以外にも細かな機能強化が施されている。どのソフトも既存ユーザーなら、迷わずバージョンアップして損はないだろう。

では、「新しくどれを買うべきか？」と聞かれても悩む要素はそれほど多くない。それぞれ方向性がはっきりと分かれているからだ。RIA（リッチインターネットアプリケーション）を指向する人もしくはプロのウェブクリエイターやプロ水準の環境を得たい人は、Dreamweaverを選べばよい。とりあえず簡単にホームページを作ってみたい人や、高価なソフトは手がでないという人はホームページ・ビルダーで十分だ。とにかく機能が豊富なので楽しめる。今までソフトを使っていなかった方にも、この価格と機能であればおすすめしたい。私としては、転送予約とWebサイトチェンジャーだけでも、かなり購入意欲をそそられた。

少々微妙なのが、GoLiveのポジションだ。本体のみでもいいソフトであることは間違いないのだが、GoLiveの一番の強みは、Photoshopやillustratorとの連携だ。InDesignとも連携するのでペーパーメディアもウェブメディアも両方手がけるプロダクションにとっては非常に魅力的ではあるが、メインのDTPソフトをQuarkExpressからInDesignにリプレースするかという問題と同時に検討することになるだろう。



画像1：サイトマップをデザインするGoLiveの「ダイアグラム」。フォルダーやファイルを作ってサイトのベースを決めると同時に、プレゼンテーション用資料としても利用できる。

プロの現場では二刀流がトレンドになる？

では、乗り換えを考えた場合はどうだろうか。プロの現場においては、今後DreamweaverとGoLiveの二刀流が要求されるかもしれない。ペーパーメディアからデータを流用する部分はGoLiveを使い、リッチコンテンツの入る部分はDreamweaverで作るという形だ。

また、プロではない一般的なユーザーでホームページ・ビルダーを利用していて、よりハイレベルなウェブ制作環境を得たいユーザー、またはプロを目指したいというユーザーはDreamweaverに乗り換えるのがいいだろう。もう少しハイレベルなソフトを使うために投資してもいいと考えればホームページ・ビルダーからGoLiveに乗り換えるという選択肢もある。ただし、ハイレベルな環境が欲しいと考えたとしても、リッチメディアに関心があるのならFlashから先に買い揃えたほうがいい。ホームページ・ビルダーでもFlashムービーの挿入はできるからだ。

参考として左に比較表を挙げた。何しろ方向性の違う3本なので、単純にスペックを比較することはそれほど意味を持たないが、最後に視覚的なサイト管理機能について付け加えておこう。GoLiveでは、デザイン性に優れた「ダイアグラム」という機能がある。方眼紙のような画面に自在にパーツを配置してサイトツリーを作成するもので、プレゼンテーション用としても、開発チーム向けの設計図としても非常に優れた図を作成できる（画像1）。そのうえ、作ったツリー図どおりにフォルダーやファイルの階層を自動的に構築し、それぞれのリンク構造もそれに合わせて書き換えてくれる。Dreamweaverには「マップビュー」、ホームページ・ビルダーにも「ビジュアルサイトビュー」という似たような機能があるが、GoLiveの方が直感的で扱いやすい。

■3大ウェブオーサリングツール比較表

	Macromedia Dreamweaver MX 2004	Adobe GoLive CS	IBM ホームページ・ビルダー Version 8
対応OS	ウィンドウズ/マック	ウィンドウズ/マック	ウィンドウズ
通常版価格	48,000円	24,800円	12,800円
対応言語	HTML/XHTML/CSS1、2/JavaScript/XML/ActionScript/ColdFusion/CFML/ASP/ASP.NET/JSP/PHP/EDML/TDL/VB/VBScript/WML	HTML/XHTML/CSS1、2/JavaScript/XML/WML/MMS/SMIL/SVG/QuickTimeスクリプト/Perl/PHP	HTML/CSS1、2の一部
構文チェック	インターネットエクスプローラ（ウィンドウズ、マック）、Mozilla、ネットスケープ、Opera、Safariの主要6ブラウザーの各バージョン対応、自動ブラウザー互換機能	HTML4、XHTML1.1などの仕様、主要ブラウザー互換チェック	ホームページ・ビルダー内基準
アクセシビリティーチェック	W3Cアクセシビリティー/米国リハビリテーション法第508条	W3Cアクセシビリティー/米国リハビリテーション法第508条ほか（WebXACTと提携）。文書の内容やファイルサイズなどもチェック可（クエリ機能）	画像の代替テキストなど、HTMLに関するものの一部
グラフィカルなサイトツリー管理	マップビュー機能	ダイアグラム機能	ビジュアルサイトビュー機能
Office文書取り込み	Word/Excel読み込み・ペースト	Excelワークシートのペーストのみ可能	Excel読み込み・ペースト/Word文書ペースト可能
画像加工	ビルトインFireworksテクノロジー	ImageReadyなどに依存	「ウェブアートデザイナー」などのソフトが付属

©1994-2007 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.